

平成20年(ワ)第1978号, 第2900号 ウィルス性肝炎患者の救済を求める全国
B型肝炎訴訟・九州訴訟損害賠償請求事件

原告 原告番号1番ないし44番

被告 国

意見陳述書

平成20年9月24日

福岡地方裁判所 民事第2部 御中

原告 20番

1 私には2人の子どもがいます。子どもたちを初めて抱いたときの喜びを、私は今でも覚えています。

生まれたばかりの長男を、看護師さんが抱えてきてくれました。初めての子どもをそっと抱きあげました。小さくて壊れてしまいそうでした。のぞき込むと、目のくりくりした愛らしい顔をしていました。母親になれた喜びがこみ上げてきました。「健康に育てて欲しい。」ただそれだけを願いました。

2年後には女の子が生まれました。嬉しさもひとしおでした。この子を抱いて、ただ健康であってほしいとだけ願いました。

2 39歳のとき、B型肝炎に感染していることを知りました。

体調の変化を感じていました。胸の奥からしめつけられるような息苦しさに襲われました。話をするのもきつくなりました。床を這って移動するような日々が続きました。出来合の総菜で食事を済ませ、泣きながら食器を洗いました。掃除も満足にできず、家の中は荒れていきました。子ども達に母親らしいことを何一つしてあげることができなくなりました。

3 感染を知ってすぐ、医師から、子ども達も感染しているかもしれないから検査をするように言われました。

検査を受ける子どもたちのそばで彼らの横顔をじっと見つめていました。息子は11歳、娘は9歳でした。ふたりは、自分の置かれた状況をどれだけ理解していた

なのでしょう。注射嫌いの息子は、目をくりくりさせながら、緊張した様子で採血を受けていました。娘はただおとなしく黙って採血を受けていました。

私は、医師が、子どもたちが「100%感染しているとは限らない。」と言ってくれたことを何度も思い出しました。「感染だけはしていませんように。」と、わずかな可能性にすぎると感じるような気持ちで、ふたりを見つめました。

- 4 1週間後、結果を聞きに行きました。医師は、検査結果を見ながら、「お子さんにも感染しています。」と淡々と告げました。私は呆然としてしまいました。

診察室を出たら、涙が溢れてきました。帰り道は涙で前が見えませんでした。

医師からは、「お子さんが他の人にうつさないように教育しないといけませんよ。」と言われました。うつるような病気にさせてしまったんだと思いました。肝硬変、肝臓癌になることも知っていました。何より、私自身に息をするのもつらいほどの症状がありました。「私のせいで、子どもたちを大変な病気にしてしまった。」私は自分を責めました。

- 5 平成7年、高校1年生だった息子が肝炎を発症しました。ようやく私の肝炎がおさまって、また平穏な生活が送れると喜んでいて矢先のことでした。息子は、制服姿のまま診察を受けていました。こんなに若くして、私が味わったのと同じ苦しみを経験しなければならないのか。高校は卒業できるだろうか。大学には行けるだろうか。成人式は迎えられるだろうか。自分が息子の人生をめちゃくちゃにしてしまったと思うと、涙があふれました。

息子は修学旅行をととても楽しみにしていました。何日も前から、部屋には大きな旅行かばんが置かれていました。中には新しいトランプが入っていました。しかし、医師から旅行に行くことを止められてしまいました。息子は、青い旅行のしおりを見せながら、医師に食い下がりました。「どうしても行ったらだめですか。スキーもしないから、行ったらだめですか。」と何度も訴えていました。「待っている患者がたくさんいるから、帰ろう。」と私が言っても、納得しませんでした。最後に、肩を落とし、黙ってしおりをかばんにしまいました。

ほかの生徒が修学旅行に出かけている間、ただ1人学校へ通う息子を、私は送って行きました。校庭はガランとして、雪が舞っていました。その中を、ただでさえ小柄な息子が、肩を落としてとぼとぼと歩いて行きました。小さな後ろ姿をじっと見送るしかありませんでした。

卒業アルバムの修学旅行のページは、開くことができません。

- 6 高校を卒業して1年後、息子は、肝臓の数値が500以上に上がり、肝生検のた

め入院しました。

息子は、ベッドの上で、あおむけになって点滴を受けていました。私の顔を見ると、睨み付けるような表情をしました。「お母さんのせいで僕はB型肝炎になった。」とポツツと言いました。私は何も言い返せませんでした。「ごめんね。」とさえ言えませんでした。

7 最近になって、娘からも言われました。この裁判のことで、娘と話していたとき、「お母さんは、肝炎がおさまっているから、これから発症する私のこわさがわからんやろ。」と大きな声で言ってきました。普段はおとなしい娘、心配事など何も言わない娘です。私は、娘の人生も狂わせてしまったのだと、また自分を責めて、涙が出ました。

8 国の役人の方は、私たちがどのような思いで生きてきたか、どれだけ涙を流してきたか、どんなに苦しかったか、わかっていますか。若くして発症してしまった息子。これから結婚、出産をひかえて、いつ発症するかわからない娘。私は、その全てが自分のせいだと、自分を責め続けてきました。札幌の裁判で、最高裁判所が、予防接種でB型肝炎に感染したのは国の責任だと認めました。私はそれを知って、「子どもたちの人生を狂わせたのは、私の責任ではなかったのだ。きっと国は私たちを救う対策をとってくれるのだろう。」と思いました。だけど、国は何もしてくれませんでした。私は、こうやって裁判を起こすしかありませんでした。

9 裁判長、どうか、私たちがどのような思いで生きてきたか、わかってください。そして、私たち親子が生きていく道筋を示してください。よろしくお願いします。

以 上